

旺文社文庫

旅 愁 (下)

横光利一著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

赤松好夫

【編集顧問】
(五十音順)

亀井勝一郎
塩田良平

茅 誠 司
中 島 健 蔵

木 村 毅
森 戸 辰 男

旺文社文庫

旅

愁 (下)

240 円

—全2巻—

昭和41年6月10日

初版発行

旺文社文庫

旅 愁 (下)

横光利一著

目 次

旅 愁 (下)

解 説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

横光さんのこと

『旅愁』はなぜ読まれるか

代表作品解題

参考文献

年 譜

海老池俊治 えびいけしゅんじ 四八七

(上巻)

(上巻)

四八七

古谷 綱武 (上巻)

亀井勝一郎 四九六

五〇二

五〇五

五〇六

挿絵

朝倉

撰

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

旅

愁

(下)

南と矢代(やしろ)の別れたのはハルピンの(1)駅だった。彼は一路大連(たいれん)まで来てそこから飛行機で福岡まで飛ぶつもりだったのに、平壤(へいじやう)まで来ると先は雨がひどく不時着(ふじちやく)したので、途中から汽車に替(か)えて海峡を渡った。彼は昼間の日本内地を見たいと思っていたが、下関(しもくせき)へ上がったのは夜の一時ごろになった。東京行の出るまでには、まだ一時間半もあったので、彼は山陽ホテルで休息している間に東京の自宅へ電報を打った。そのついでに千鶴子(ちずこ)へも打とうかと暫く茶を飲みながら考えたが、やはりそれだけは思い止まった。関門海峡(かんもんかい)の両側の灯が、あたりに人の満ち溢(あふ)れている凄じさで海に迫(せま)っていた。目にする物象(ぶつしょう)が絶えず跳ね動(は)いているような活気に矢代は人からも押され気味になり、受け答えにも窮(きゆう)する遅鈍(ちどん)なものに、いつの間にか自分になつてゐるのを感じた。それはひどく時代の遅れた自分であり、早急の間に合いかねるその自分から錆(さび)が沁(し)み出ているようだったが、しかし、ともかくも日本へ無事帰りついている自分であることだけはたしかだった。今はもうそのことだけで彼は嬉(うれ)しく、後はどのような目に逢おうとも忍耐(にんたい)できると思い、彼は胸の中に笑いの綻(ほこ)ろんでいくようなゆったりとした気持ちで周囲を見回した。人々の多くは洋服を着ていたが、どれも皆洋服のようには見えなかった。男たちは皆眼光(がんこう)が鋭く不意に殺到(さつとう)して来そうな気配(けはい)の中を、婦人たちがなんの恐れ(おそ)げもなく歩いているのが、不思議と優雅(ゆうが)ななまめいた魚の泳ぐ姿に見え楽しそうだった。上りの汽車に乗ってからも彼は満員の食堂車へはいって見た。ナイフとフォークを使う人々の手の早さが刀を使っているようで、狭い車内の傾(かたむ)いて飛ぶぐらぐらした中でも、揺れつつ肉を突き刺

(1) 中国東北区黒竜江省の主要都市。

(2) 中国東北地区遼寧省南部の港市。

(3) 朝鮮半島北西部のテート

ン川(大同江)下流に位置する古都で、第二次世界大戦後、北鮮に成立した朝鮮民主主義人民共和国の首都。

し巧みに口へ入れていた。総体が気忙しく立ち回り、入り乱れているにもかかわらず、それぞれな
 んの間違いもなく無事安泰に流れてゆくようなその感じは、見ているも胸の空くほど凄じい勢いだ
 った。それはもう西洋でもなければ東洋でもなかった。まさしくそれは世界で類のない一種奇妙な
 生の躍動そのもののような姿態だと思った。

その夜はつづいた睡眠不足で矢代はすぐ眠くなったが、寝台を取り忘れていたので展望車の椅子
 にそのままとうとした。彼の横にマニラから帰って来た青年が二人、十年ぶりだといって、窓か
 ら故郷の沿線の様子を楽しげに眺めていた。対い合った二人は嬉しさに落ちつかないらしく右を見
 たり左を見たり、絶えずして眠らなかった。矢代にも向こうから話しかけてきて、マニラの状況を
 報らせたり、どこから来てどこへ行くのかと訊ねたりした。矢代はシベリアから帰って来たと言え
 ると、シベリアのどこかとまた訊ねた。乗車したのはベルリンからだと言えると、急に二人は他人
 行儀な冷淡な顔つきになって窓の外を向いてしまい、それからもう話そうとしなかった。矢代はそ
 れを機会に横になって眠った。

目が醒めたときはもう朝になっていた。窓の下に海が広がり砂浜の上を浴衣の散歩姿がたくさん
 あちこちに歩いていていた。夾竹桃の花が海面の朝日を受けて咲き崩れている間を、よく肥えた紳士が
 敷島を一本口に喰わえ、煙をばっばと吐き流して歩いているのを見て、矢代は瞬間目の醒めるよう
 なショックを受けた。淡路島らしい島が薄霧の上に煙ってかすかに現われてくる。雄松の幹のうね
 りが強く車窓に流れていった。日本の朝の日の光を矢代は初めて見たのである。彼は車窓から乗

り出すようにして、一見したところ、自分の国は世界で一番無頓着むとんちゃくそうににこにこした、幸福そうな国だと思った。そのうちにシベリア以来すっかり忘れていた合服あいふくが夏の日にだんだん暑くなってきた。

いつも矢代やしろの旅は目的地へ着くころになると夜がきた。東京駅へ近づいて来たときもそうだった。故郷へ帰りついたと思う気持ちは、山陽線から東海道を上って来る車中の憶いおもの中に吸われてしまい、今は身心とも彼は疲れ果てていた。物音らしいものは耳鳴りで聞こえず、かすめ通る灯火とうかの綾の間に見えたホームの荷造りの藁束わらたばが、いよいよ身近なものの匂いを伝えて迫せまって来る。継ぎはぎだらけの襯衣シャツを着せられても苦にならぬ、里帰りの子のように疲れが気持ちよかった。

汽車が停とまって矢代はホームへ降りた。最後の車のため人込みから離れた端はなれの柱はしらの傍そばで、夏羽なつば織おりの背の低い父の姿がすぐ彼の目についた。父は暫しばらく矢代を見つけなかったが、彼のほうから片手を上げて父のほうへ歩いてゆくと、父は「あッ」と口を開き、そのまま無表情な顔で近よって来た。その後から見えなかった母が小走りに迫って来た。矢代は父の前で黙ってお辞儀じぎを一度した。非常に鄭重ていちょうなお辞儀をしたつもりだったのに、妙に腰が曲がらず軽くだだ頭を下げただけのような姿になった。

「どうもご心配かけました。」

と矢代やしろは父の後の母を見て言った。

「お帰りなさい。」

母は矢代の顔を見ずはすかしそうにそう言っただけで、重ねた両手の中に縮ちぢまるような姿で立っていた。父も母もさて次にどうしてよいのかわからぬらしく動かなかったが、矢代もやはりそのままだった。その間も東京駅の光景が薄霧うすぎりの中から、見覚えのある活気を漸次鮮明ぜんじせんめいに浮かべてきた。赤帽が荷物を運んで行く後から三人はホームを出た。矢代は靴でしっかり歩いているはずなのに、まるで地から足が浮き上がり、身体が絶えず飛び歩いているように思われた。障壁しょうへきが尽く取り脱はされた自由な気持ちに彼は自分がひらひら舞まっている蝶ちように似て見え、目につくあの灯この灯と広場の明りを眺めながらまたタクシーを待った。

「とにかくわかったぞ。なんだかしらわかった。」

と彼はひとり呟つぶやいた。そのくせ何がわかったのか考えもしなかったが、もう考えずとも、証明を終えた答案から離れたような身軽さで、後を振り返る気持ちはさらになかった。

「なんか僕食すべたいのですよ。お寿司すしがどうも食くべたいなア。ちょっとお母さんさきに帰かえってくれませんか。」

矢代は母にそう言ってタクシーに乗り込み途中で自分一人だけ銀座で降りるつもりだった。銀座のほうへ動き出した車の中で、彼は、今は勝手気ままの言える子供の自分を、しあわせこの上もないことだと思った。母の縮ちぢみの襟えりもとが清潔な厳きびしさで身を包んでいる夏姿へ、彼は凭よりかかるように反そり、自分の永らく忘れていたのは、この母と父との労苦だったとふと思ったが、それも今は自

分の身の疲れと同じように感じられた。

「もうじき涼しくなるが、まだ暑さは相当つづくね。」始終黙っていた父は誰にともなくひとこと言った。

「そうだ。まだ夏なんだな。」と矢代は呟くように言った。そして、季節のことなどすっかり忘れていた自分に気がついて初めて笑った。

「あなた、暑くないの。合服なんか着て。」

矢代を見てそう言う母に、「なんだかもうわからないですよ。」と言いながら、彼は、春夏秋冬といってもどこのもそれぞれ違うのだと思ったり、東京よりもどこよりまず帰れば温泉へ行きたいと、パリで友人らと話したことを思い出したりした。しかし、こうして帰ってみれば、やはりどこより彼は東京が懐しかった。東京のどんな所がおもしろいのかわからなかったが、この地が間違はなく東京だと思ふことで、彼は心が落ちつけるのだった。車が帝国ホテルの前まで来たとき、父は、「洋行から帰ると、その晩はホテルへ泊まるほうがいいと人はいうが、お前すぐ家へ帰ってもいいのか。」と訊ねた。

洋行と父に言われると、矢代は突然身の縮むようなはずかしさを覚えた。

「洋行なんて——そんな大げさなものじゃなかったなア、僕のは。」

矢代はちょっと黙った。何を言おうとも、今は意味など出しようがないことばかりのように思われた。何か悲しくもあれば嬉しくもあり、どちらへ転げようとも同じな、ただ軽るがるとした気持ちだった。

「洋行というのはお父さん、あれは明治時代に言ったことですよ。」

ふとまた彼はそう言ったが、今はそんなことより急に街が見たくなった。街のどこが見たいというより、いつも見ていたあそこもここもというふうに見たくなり、そして、まず何より寿司が食べたいと思った。

「幸子はだいぶよくなりましたよ。今夜も来たいと言ったんだけど、また悪くなられるとね。」と母は矢代の妹の容態のことを言った。

「よかったですよ。どうも、あれのことが気になってね。疲れが癒ったら、僕病院へ行きますよ。」
「そうしておくれ。喜ぶわ。」

「だけど、僕、なんだか一度、滝川の家へも行きたくってね。東北地方が一番見たいんですよ。」と矢代は言った。母の実家の滝川家のある東北地方を見ることは、帰って彼のすべき計画の第一歩のように思われていたからだった。しかし、母とそんなことを話している間も、彼は父ひとりをそちらへ捨てているような自分の態度に気がついて、実はそうではないはずなのに、なぜともなく父には、言うべきことも言いにくいことがさまざまにあるのだった。

子供の洋行を誇りとしてしているらしい明治時代の父に、矢代は自分の思いを伝えるには、どう言えばよからうかと咄嗟に考えたが、さきから父はただ「ふむ、ふむ。」と言うばかりで、窓から外を見て黙っていた。前に父は、自分は金を儲けたら一度だけどうしても洋行をしてくるとのたと、口癖のように言っていた。その父の若いころからの唯一の念願も、それも子の矢代が父に代って、その意志を遂げて帰って来た今だった。その子の言うことが、父の願いに脱れた奇妙なことを言い出

したのであってみれば、父にわからぬのももつともと言うべきであつた。

「やはり時代というものは、争われずある人です。ね。これで。」

矢代はうやむやなことを言つて言葉を濁したが、洋行して来た自分よりも、子供にそれをさせることのみ専念して、身を慎しみ、生涯を貯蓄に暮らしつづけた父の凡庸さが、自分よりはるかに立派な行ないのように思われた。しかし、彼は父がなぜともなく気の毒な感じがした。それはもう言いたくもない、生涯黙つていたいことの一つだった。彼は父の期待に酬いることのできなかつたはずかしさを瞬間心底に感じたが、すぐまた諦め返して街の灯を見つづけた。

「ああ、しかし、いったい、何を自分はしてきたのだろう。」

ふとときどきそんなに彼は思った。そして、得てきた自分の荷物を手探りかけては、いや、何もない、袋は空虚だと、足もとに投げ出す気持ちの底から、暫く忘れていた千鶴子（ちずこ）のことが頭をかすめ通ってくるのだった。

銀座裏で車を捨て矢代はひとり寿司屋を目あてに歩いた。通りや街の高い建物の迫りがまつたくなかつた。打ち水に濡れている暗い裏街をぬけて行く間も、彼はただ食い物を追うだけの自分を感じた。団十郎（だんじゅうろう）好みの褐色の暖簾の下がつた寿司屋へはいり、矢代は庭の隅のほうに腰かけると、漆塗りの黒い寿司台に電球の傘が映つていた。シャパンという英語は漆という意味だということを、ふと矢代は思い出した。そして、黒塗りに映えた鮭の鮮かな濡れ色から視線が離れず、テーブルに凭れて初めて、彼はいつも一番舌の上に乗せたかつたのは、この色だったと思つた。

鮭が出たとき、彼は箸でとるより指で摘んでみたくなくて、つづけて幾つも口に入れてまた皿を

変えた。身体からだの底そこに重く溜たまってゆく寿司の量が、争われず自分の肉となり、血となる確かな腹はら応こたえを感じさせた。下を見るとここにも、靴くつまで濡ぬれそうな打ち水がしてあった。「ははア、水だな。」と彼は言った。

内庭に清水を撒まく国は日本以外に見られなかったのを彼は思い出した。そして、山から谷から流れ出る、豊かな水の拭ふき潔きよめてゆくその隅々すみずみの清らかさを想像して、自然にそこから生まれてきた肉体や、建物や食物の好みが、およそ他の国のものとは違う、緻密ちみつな感覚で清められてきたことなど、瞬間のうちに彼には領うなずけた。しかし、今は矢代やしろはそんなことも、特に考えようとしたのではなかった。

もう街は遅くなっていたので人通りも少なく、電灯も暗かった。彼は寿司屋を出てから、行きつけのおでん屋のほうへ歩いてみた。日本を出発する前にいつも歩いた自分のコースを、またそのように歩いてみたくなったのだが、歩きながら彼は、これからの来る日も来る日も、こうして自分は同じ所を歩き、一生を過ごすのかもしれないと思った。すると矢代は今までとはうって変わって、急にぐらりと悲しくなった。今までの旅中はある街に着いても、二たびふたここを見ることもなく、明日は旅発って行くのだと思ったのに、今はそうではなかった。もうここは旅の納めおさめで明日からここを動かぬのだった。ここは自分の生まれ出た土地で、墳墓ふんぼの地だと思い、いつの間にか人は識しらずに自分の屍しかばねを埋める場所を、こんなに捜さがし回っているのだと思った。その過ぎた月日の物思いも、停とまってみれば、停まったところからまた、月日がめぐってゆくのであろう。そう思うと、風の消えた湿しめった裏小路に踏みつけられた紙屑かみくずも、はッと眼差まなざしを合わせたものの飲のびに似て見えたりした。

實際一つ一つのものが今の矢代には意味があった。そうしておでん屋の前まで来たとき、彼は何げなく敷居を跨ぐとうとした足を思わずまた引っ込めた。入口の敷居の土の上に、一握りの盛り塩が円錐形の姿を崩さず、鮮かな形で目についたからだだった。「おや、こんなものがあったのだ。」と彼は思った。いつも人に跨がれ、踏みつけられたりしていたその塩であった。それが闇の中から、不意に合掌した祈りの姿で迎えてくれたのだ。物いわないその清楚な慰めには、初めて彼も長途の旅を終えた感動を覚えた。彼は襟を正して黙礼しつつ敷居を跨いだ。跨ぐズボンの股間から純白のいぶきが胸に噴き上り、肅然とした慎しみで、矢代は鼻孔が頭の頂まで澄み透るように感じた。彼は思いがけないこの清めに体中のねばりが溶け流れた。彼は中へはいってから、杉の板壁に背をよせかけても、それからもう、杉の柱目が神殿の木目に現われた歳月の厳しさや、和らぎに見えるのだった。人は知らず、これはただならぬ国へ帰って来たものだと、彼は暫く親しい主婦に銚子も頼めなかった。

客は矢代の他に二人よりいなかった。二人の客はそれぞれ別の客だったが、一人は前からここでよく顔を合やす常客で、他の一人は腰かけたまま床下に俯いていて、今にも吐きそうな苦しげな姿勢をしていた。鈍い電灯の下でその腰折れ客はときどき咽喉を鳴らした。

矢代は見ていても別に二人の姿が気にかからなかった。板壁に人の凭りかかった油の痕跡が、くろずんだ影法師となつて浮かんでいた。彼はその中の一つにも自分の油が滲みついてるのを感じた。そして、あれが日本を発つ前の、自分の痛苦懊悩の日々の印刻かと思つて懐しかった。彼は指

(1) 料理店や寄席などで、縁起をかついで門口にもる塩。